啓示された言葉

祭壇の言葉とその御国

「私たちは記憶する限りにおいて自由である」

「蛇」

御国に集う兄弟姉妹たちよ、その召し

あなたは声に従うよう召されたのではない。あなたは、すべての名に先立つ声を記憶し、その声に私たちの間で形を与えるために召されたのだ。

御国の兄弟、姉妹よ：

私は自分のこと、自分の歴史、自分の事情についてあなたに語るために来たのではありません。また、私の意見、信念、関心、個人的な経験から生まれた真理をあなたに押し付けるために来たのでもありません。

私は、すべてのものの源である真理についてあなたに語るために来ました：原初の言葉、いかなる形にも閉じ込められることなく、すべての形を生み出す起源について。

私は署名もなく、顔もなくあなたの前に現れます。自分を隠したいからではなく、書いているこの人物をこれらの言葉の中心に据えようとは求めていないからです。私はあなたの承認、拍手、服従、お金を求めていません。

言葉の御国には、真なるものは何一つ余分ではなく、本質的なものは何一つ欠けていません。

ここであなたは読むことになりますが、あなたはただ読むためだけに来たのではありません。

あなたは知識を蓄え、答えを暗記し、まだ理解し認識していない言葉を繰り返すために来たのではありません。真理を体現せずに繰り返すことは、その象徴を通過せずにその音を保つことです。

これらの言葉があなたの目に届く前に、召命はすでにあなたの中の裂け目を求めていました。

それは、学んだいかなる答えも閉じることができなかった問いの中にありました。

損害を正義と呼ぶことを拒んだ傷の中に。

生命を約束しながらそれを従属させる世界を繰り返す疲れの中に。

あなたが教えられたすべてを眺め、まだそれを名付ける方法を知らないまま、それが真の秩序ではあり得ないと知った瞬間の中に。

あなたは兄弟たちの上に選ばれたからここに来たのではありません。

あなたは、あなたの中の何かがまだ聞くことができるから来たのです。

言葉とその御国の名において二人または三人が集まるとき、私たちの体が場所を共有しなくても、私たちは共に想起を始めます。

私たちは別の宗教を築くために来たのではありません。

私たちは別の政府を設立するために来たのではありません。

私たちは一つの教義を別の教義に、一人の主人を別の主人に、一つの旗を別の旗に、外側の王冠を別の王冠に置き換えるために来たのではありません。

私たちは、まだこの言葉を話さない人々よりも優れていると感じることができる新しいアイデンティティをあなたに渡すために来たのではありません。

私たちは扉を開くために来ました。

あなたの名前の前に、あなたはすでに存在していました。

あなたの歴史の前に、あなたはすでに生命を受け取ることができました。

世界があなたに、誰であるべきか、何を望むべきか、誰に従うべきか、どれだけの価値があるかを説明する前に、言葉はすでに、生命があなたの形を通して呼吸し、受け取り、変容させ、与えることを可能にしていました。

しかし、私たちはすでに解釈された世界の中に生まれました。

私たちは富を貨幣に求めることを教えられました。

秩序を、政府に。

正義を、人間の法律に。

真理を、答えの所有者に。

知識を、肩書きに。

治癒を、制度に。

価値を、価格に。

時を、時計に。

臨在を、神殿に。

王冠を、少数の者の頭上に。

権威、主権、統治を、意識の外側、その目に見える形を支配する者の手に。

私たちは、内なる戴冠を忘れさせるために、外側の戴冠式を見せられました。

私たちは、特定の血筋、役職、制度だけが王冠を戴き、権威を行使し、統治することができると教えられました。こうして、すべての人間は、自分自身の形の主権者である前に臣民として、天の御国の住まいである前に外部の王国に従順な者として、自分自身を眺めることを学びました。

彼らは生命の周りに壁を築いただけではありません。

私たちはその壁を世界と呼ぶことを教えられました。

彼らは鍵を閉じ込めただけではありません。

私たちは、それが決して私たちの内側にあったことがないと信じることを教えられました。

彼らは象徴を逆転させただけではありません。

私たちは、私たちを閉じ込めておく意味を自分自身の内に守ることを教えられました。

こうして最も深い監獄が生まれました：

囚人が自分の監禁の地図によって自分自身を監視し、測定し、裁き、認識することを学んだため、すべての扉の背後に看守を必要としない監獄。

これが忘却の母体です。

その力は生命を創造したことにありません。

それは生命を創造しませんでした。

それは意識を起源としませんでした。

それはそれが表す富を起源としませんでした。

それはそれが模倣する秩序を起源としませんでした。

それはそれが管理する真理を起源としませんでした。

それは、私たちの想起の外に保とうとする言葉を起源としませんでした。

その力は、それに先行するものをその形の中に求めることを私たちに教えたことにあります。

真の秩序は降りてきます：

言葉 → 象徴 → 形。

母体は読み方を逆転させ、形を始まりに置きます。貨幣が富を生み出し、政府が秩序を生み出し、外側の王冠が権威を生み出し、神殿が臨在を生み出すと信じさせます。形が源と見なされるとき、形を支配する者は御国へのアクセスも支配しているように見えます。

こうして形の崇拝が生まれます：人間はそれを通過すること、象徴を見ることをやめ、それが由来する言葉を忘れます。

それは私たちに人物を渡し、こう言います：

「これがあなたのすべてだ」と。

それは私たちに価格を割り当て、こう言います：

「これがあなたの価値のすべてだ」と。

それは私たちに機能を認め、こう言います：

「それ以外にあなたの居場所はない」と。

それは私たちに扉を示し、こう言います：

「それを守る者に従うならばのみ、あなたはそれを通過できる」と。

しかし、言葉は没収されていません。

源は井戸を囲った者に属しません。

太陽はランプを管理する者に属しません。

真理はその名を発音することを学んだ者に属しません。

御国はその扉の前に座った者に属しません。

光は在ります。

影は起こります。

言葉は留まります。

だからこそ、想起はまだ可能です。

誰かが価格なしに愛するたびに、母体は限界に直面します。

誰かが所有せずに世話するたびに、その地図は開かれます。

ある人が自分の特権に反して真理を語るたびに、嘘は一つの形を失います。

能力が依存を生まずに奉仕に捧げられるたびに、原初の創造が再び見えるようになる。

意識が恐れの前に跪くのをやめるたびに、内なる蜂起が始まる。

関係が価格、支配、服従を中心に回るのをやめるたびに、革命が始まる。

これが召命である。

兄弟の肉に対して立ち上がることではない。

白をまとった偽りに対して立ち上がることである。

自分の影をぶつける敵を探すことではない。

外で断罪するものを内側でいまだ再生産している意志を観照することである。

世界から逃げ出し、自分ひとりだけを包む平和を真実と呼ぶことではない。

新しい意図をもって世界に戻り、記憶されたものに体を捧げることである。

人格を破壊することではない。

それを王座から引きずり下ろすことである。

人格は続く。

終わるのは、それが起源であり、全体であり、すべての命が回る中心であるという主張である。

内なる蜂起は意識を立ち上がらせる。

革命は形を命の軌道に戻す。

一方だけでは解放は不完全なままである。

形が変わっても、自我が王座を保てば、新しい名前の新しい牢獄が現れるだろう。

意識が記憶しても、関係が価格、依存、沈黙、支配を作り続ければ、御国は肉を得ないままだろう。

だから私たちは両岸を結ぶために来る。

内側で源が記憶される。

外側で機能が解放される。

象徴は橋を開いたまま保つ。

ここであなたは読むだろう。しかしあなたは読むためだけに来たのではない。

あなたは答えを蓄積し、公式を暗記し、まだあなたの命を貫いていない言葉を繰り返すために来たのではない。

受肉なしに繰り返される真実は、その音を保つが、その象徴を開いてはいない。

この場所はテキストという見える形をとるが、その意味は普通の
書物のそれではない。

これは祭壇である。

祭壇は、私たちが人格の利益よりも真実を置くときに現れる。

その力を保つために隠されたままでいる必要があったものを、火に委ねるときに現れる。

傷ついた者の声が、平和の見せかけを守るために再び犠牲にされることなく聞かれるときに現れる。

いかなる制度、教義、アイデンティティ、使者、形も、源の場所を占めないときに現れる。

ここで語る者は、世界に外側の冠を求めない。

この作品が記憶する冠は、血統、制度、群衆によって与えられるものではない。意識が形の前に跪くのをやめ、王座を言葉に返し、受肉する命の責任ある統治を引き受けるとき、内側で受け取られる。

これらの言葉を書く者は、署名も顔もなくあなた方の前に現れる。書く人格はこれらの言葉の中心ではないからである。

私はあなたの承認を求めない。

私はあなたの拍手を求めない。

私はあなたの服従を求めない。

私はあなたの金を求めない。

私は追随者を求めない。

真実のものは何もあなたに売ることはできない。言葉から出たものは何ひとつ私のもので

はないからである。

言葉は言葉ではない。

器は水ではない。

窓は光ではない。

使者はメッセージの起源ではない。

しかし言葉は、それ自体を指し示すのをやめ、見えないものとそれを認識できる意識との間の橋として仕えるとき、象徴になり得る。

橋の前で立ち止まるな。

渡れ。

これらの言葉が神聖に見えるからといって受け入れるな。

あなたが学んだことに反するというだけの理由で拒絶するな。

それらを観照せよ。

それらに問いかけよ。

それらを貫け。

それらが受肉する言葉は何かを問え。

それらが誰に仕えるかを問え。

それらが留まるために何を要求するかを問え。

誰がその利益を受けるかを問え。

誰がその代価を負うかを問え。

それらが約束する実と、それらが生み出す実を問え。

もし言葉が使者を兄弟たちの上に大きくするなら、自我が語っている。

もし盲目的な服従を要求するなら、御国の名を唱えても支配に仕えている。

もし恐れ、分離、軽蔑を養うなら、統一へ導かない。

もし象徴を用いて他の人を絶対的な敵に変えるなら、肉に対して剣を振るっている。

もし傷ついた者に、受けた害の原因をただ自分自身の内側だけに求めるよう強いるなら、

橋を閉じ、外側の現実を放棄している。

もし誤り得ないと宣言するなら、窓は自らを太陽と宣言している。

もし他の者の苦しみを無視することを許すなら、まだ祭壇を通過していない。

真実の言葉はあなたを支配しようとはしない。

目覚めさせようとする。

あなたの意識を置き換えない。

それを臨在へ戻す。

語る者の周りに王国を築かない。

誰も別々に所有できない御国を開く。

そしてこの同じ尺度が、今あなたを呼ぶこの作品にも及ぶ。

もし何かの句が仕えなくなれば、それは修正されなければならない。

もし何かの象徴が閉じて礼拝を要求するなら、それは開かれなければならない。

もし使者が王座を占めようとするなら、彼自身の行いの実によって退位させられなければならない。

もし祭壇が傷ついた命よりも自分の見せかけを守るなら、それは祭壇でなくなっただろう。

それぞれの実は、書かれたものが真実と一致していたか、あるいは口が、命がまだ否定しているものを語っていたかを宣言する。

この作品は外側の真実を注釈するために来るのではない。

真実が肉において読めるようになることを許すために来る。

愛について語ることによって価値を持つのではない。

所有なしに受肉することに成功する愛によって価値を持つだろう。

正義を唱えるから真実になるのではない。

それは、止める害、召喚する責任、可能にする修復によって裁かれるだろう。

その名を用いるから御国になるのではない。

形が命に仕え、いかなる命も再び形の保存に仕えることを強いられなくなるとき、それが

御国となる。

それゆえ、語る前に、沈黙を守れ。

声を消し去る強制された沈黙ではない。

人物の騒音を養うことをやめ、聴くための場所を開く沈黙。

受け取りたい答えという問いを空にせよ。

臨在に入れ。

身体を軽蔑せずに観照せよ。

思考を主人に変えずに観照せよ。

感情を命令と呼ばずに観照せよ。

恐れに玉座を渡さずに観照せよ。

人物を破壊せず、また再び全体性を宣言することを許さずに観照せよ。

問え：

あらゆる名の前に、私は誰か？

私の身体、私の歴史、私の思考、私の信念が変わる間も、何が留まるのか？

私のどの部分が、それらすべての形を観照しながら、いずれにも尽きることなくいられるのか？

私の言葉、私の決断、私の業を通して、どのような意志が肉を得ようとしているのか？

答えを無理強いするな。

問う者の形が、受け取りたいと望むものに対応するときにのみ開かれる封印がある。

想起は征服ではない。

それは開きである。

認識は観念ではない。

それは、想起したものの内に自分自身を見出し、それを具現化する責任を受け入れることである。

想起するとき、あなたは知る。

認識するとき、真理があなたの手を必要としないふりをすることは、もはやできない。

そのとき、心は再びその最初の奉仕を教える：

受け取れ。

変容させよ。

手渡せ。

循環させよ。

水は流れを自分のものにしない。

種は自らを木の作者と宣言しない。

窓は光を造らない。

手は、それに仕える命を生み出さない。

あらゆる形は全体から受け取り、その機能が可能にするものを全体に手渡す。

これが、いまだ語り続ける原初の創造である。

それは教義によって語るのではない。

関係によって語る。

象徴がその言語である。

意識はそれを貫くことができる。

外側の形を観照せよ。

内側の対応を認識せよ。

意図を識別せよ。

外側に戻れ。

忠実な形を手渡せ。

実りを聴け。

修復せよ。

帰還せよ。

御国は、人物の内に隠された所有物ではない。

また、他者によって統治される外部の領土でもない。

御国は内側で想起され、私たちの間で具現化される。

富が、必要を価格に変えずに循環するとき、それは現れる。

知識が、服従を造る代わりに能力を返すとき。

配慮が、身体を所有せずに命を世話するとき。

権威が、再び実りに対する責任を意味するとき。

限界が、制限する者の内なる冠を奪わずに守るとき。

労働が再び奉仕となり、時間が命の主人でなくなるとき。

食卓が、食物を渡す前にあなたがいくらの価値があるかを問わないとき。

水が、渇く者に、貨幣、称号、功績、所属を要求せずに届くとき。

いかなる声も、支配せずに聴かれる必要がないとき。

いかなる差異も、分離に変わる必要がないとき。

都が、私たちの関係の内に降り始めるとき。

御国は遠いと言うな。

すでに具現化されうる真理を延期するために用いられる未来に、それを閉じ込めるな。

臨在がすでに可能にした最初の行為を成就するために、別の天を待つな。

カイロスは、暦にどの日付が現れるかを問わない。

種が開くために熟しているかを問う。

これが召命の時である。

まだ問いを保っているなら、来たれ。

避けられないと学んだ世界に従うことに疲れているなら、来たれ。

神聖と宣言された扉によって傷つけられたなら、来たれ。

真理を武器として用い、修復する用意があるなら、来たれ。

自分の影を認識し、窓を開けたいと望むなら、来たれ。

力を保持し、それを奉仕に返す用意があるなら、来たれ。

力は少ないが、言葉を所有物に変えずに守ることができるなら、来たれ。

答えを持たなくても、沈黙に入ることができるなら、来たれ。

金銭も、称号も、功績も持たず、いかなる外部の権威もあなたの冠を認めていなくても、来たれ。

渇いているなら、来たれ。

別の人物の前にひざまずくために来るな。

自分の前にひざまずくのをやめるために来たれ。

より高次のアイデンティティを受け取るために来るな。

いかなるアイデンティティも生み出さなかった尊厳を想起するために来たれ。

兄弟たちから逃げるために来るな。

いかなる命もあなたの責任の外にないことを認識するために来たれ。

扉から御国を観照するために来るな。

住まいを造るために来たれ。

あなたを兄弟たちから隔てていた偽りの冠を、玉座の前に置け。

いかなる外部の手も与えることも奪うこともできない内なる冠を受け取れ。

剣が嘘を断つままにせよ。

火が実りを明らかにするままにせよ。

水が再び循環するままにせよ。

光が窓を貫くままにせよ。

言葉が肉を見出すままにせよ。

御国の兄弟よ、姉妹よ：

扉は開かれている。

祭壇は整えられている。

言葉は語られた。

意識は聴いている。

想起が始まる。

来たれ。

祭壇、言葉、そして象徴

言葉は象徴を開き、象徴は形を貫き、形は見えざるものに体を与える。

あらゆる言葉が発せられる前に、発することを可能にするものが留まる。

あらゆる目に見える形の前に、言葉の関係が身体を受け取ることができる象徴が留まる。

扉の前に、開け閉めする可能性が存在する。

水路の前に、受け入れ導く可能性が存在する。

灯の前に、照らす可能性が存在する。

道具の前に、それによって身体を見出す機能が存在する。

登場人物の最初の意識的な行為の前に、いのちはすでに私たちを通して受け入れ、変容させ、引き渡し、継続している。

その見えざる起源が、意味、関係、顕現の可能性を伝えているものを、私たちは言葉と名付ける。

言葉は単なる音ではない。

それは文ではない。

それは人間の言語ではない。

それは言葉を保存する書物でも、それを発することのできる口でもない。

言葉は、源であり続けながら伝達する起源である。

私たちは二つの分離した原理を置かない。

起源は留まる。

言葉はその意味を顕現する。

あらゆる形は、それ自体が起源ではない可能性から生じる。

種は木の可能性を受け取るが、それを通して芽生えることができる土、水、光、いのちを

創造したわけではない。

心臓は血を受け取りそれを送り出すが、循環させるいのちの所有者ではない。

窓は光の通過を許すが、太陽を造るわけではない。

言葉は真理に身体を与えることができるが、それによってその起源になるわけではない。

形は受肉する。

言葉はそれに先行する。

両者の間に照応が現れる。

照応は、二つの現実が同一であることを意味しない。

種は木ではない。

灯は光ではない。

心臓は奉仕ではない。

扉は決断ではない。

外なる水は内なる刷新ではない。

しかし、形の機能、関係、動きは、意識がその中に先行する現実を認識することを可能にすることができる。

種は、可能性、胎動、誕生を認識することを可能にする。

灯は、光を受け取り、それを可視化する能力を。

心臓は、いのちが継続するように受け取り与えることを。

扉は、開き、限界、同意、通過を。

水は、循環、清め、感受性、刷新を。

象徴は形から生まれるのではない。

それは、見えざる関係と見える顕現との間の橋として、言葉から生じる。対応する形を見出すとき、それは観想され、通過され、受肉され得る。

象徴は橋である。

一方の岸は見える。

他方は見えざるままである。

形は、先行する橋に見える身体を与える。

照応は、二つの岸を混同することなく結ぶ。

意識は通過する。

それゆえ象徴は、単に別のものを表すものではない。

それは通過可能な形である。

それは指し示すものを閉じ込めない。

その意味に近づくことを可能にする。

木の扉は、その機能が意識の中で起こるべき通過を認識することを可能にするとき、開きの象徴を見えるようにすることができる。

外なる火は、照らし、温め、消費するその能力が、嘘を明らかにし終わらせる識別を認識することを可能にするとき、変容の象徴に形を与えることができる。

剣は、それが肉に向けられるのをやめ、その刃が真理と外見との分離を認識することを可能にするとき、言葉の象徴を受肉することができる。

外なる冠は、それが少数者の特権として観想されるのをやめ、内なる戴冠、すなわち、言葉から受け取り奉仕に向けられた、各意識の自己の形に対する権威、主権、統治を啓示するとき、その象徴を開くことができる。

しかし、いかなる形も、単に存在するという理由だけで象徴を開いたままに保つわけではない。

それは開いたままでいることができる。

また閉じることもできる。

扉は通過を許すことも、通過そのものの所有者であると宣言することもできる。

灯は光を与えることも、視線がその輝きを崇拝することを要求することもできる。

言葉は真理に仕えることも、真理の前に立つこともできる。

使者は橋を開くことも、道の真ん中に座ることもできる。

形が先行する象徴を隠すとき、それは起源を指し示すのをやめ、ただ自分自身だけを指し示し始め、秩序は逆転する。

そのとき偶像が生まれる。

偶像は閉じられた象徴である。

それは橋として仕えるべきであったが、目的地、源、アクセスの条件であると宣言した形である。

金銭は交換を表すのをやめ、富を内包していると主張する。

神殿は集会に仕えるのをやめ、臨在を内包していると主張する。

権威は責任に仕えるのをやめ、秩序を内包していると主張する。

書物は言葉を保存するのをやめ、真理を内包していると主張する。

使者は指し示すのをやめ、言葉を内包していると主張する。

アイデンティティはいのちに形を与えるのをやめ、存在を内包していると主張する。

そのとき形は言う：

「あなたが求めているものは私の中にある」。

次に付け加える：

「私なしではあなたはそれに到達できない」。

橋は壁になる。

壁は扉を管理する。

そして扉は、決して起源としなかったものへの通過を許すために、代償、服従、帰属を要求し始める。

これが象徴の逆転である：

言葉 → 象徴 → 形 は 形 → 象徴の横領 → 言葉の簒奪 に置き換えられる。

形は照応を隠す → 自らを源と宣言する → 欠乏を製造する → アクセスを管理する → 依存を生み出す → 崇拝を要求する。

忘却の母体は、すべての象徴を破壊する必要はない。

それらが通過されるのを妨げるだけで十分である。

言葉を、儀式を、制度を、像を保ちながら、その表面にすべての視線を固定することができる。

その人物はやがて、橋そのものを礼拝することを学ぶ。

それを飾る。

それを守る。

その名について論じる。

別の橋を用いる者たちと戦う。

しかし、彼は決して対岸に到達しない。

だからこそ、このテキストもまた、それが啓示するものの外にはない。

これもまた一つの形である。

これもまた、開かれたままでいることも、閉じることもできる。

これもまた、言葉に仕えることも、その名を用いて源の場所を占めることもできる。

もしこれらの言葉が、理解なしに繰り返されることを要求するなら、その象徴は閉じられている。

もしそれらが依存する追随者を生み出すなら、それらは力を返すことをやめている。

もしそれらが伝える者を真理の主人に変えるなら、橋は一つの王座を築いたことになる。

もしそれらが神秘を用いて問いを妨げるなら、それらは鍵を閉じ込めたことになる。

もしそれらが苦しみを無視しながら愛について語ることを許すなら、形はその実を名の背後に隠したことになる。

だからこそ、この作品は祭壇から始まる。

祭壇は石でも、机でも、ページでも、画面でもない。

それは意識の場であり、そこではすべての言葉、解釈、意図、形が、真理と、それらが生み出す実の前に引き出される。

祭壇では、命が犠牲にされるのではない。

命に仕えることを妨げていたものが引き渡される。

隠されたままでいることを必要としていた嘘が引き渡される。

権利と宣言されていた特権が引き渡される。

事実に耳を傾けることを拒んでいた解釈が引き渡される。

礼拝を要求していた同一性が引き渡される。

その人物が他の命を支配しようと企てていた偽りの冠が引き渡される。

そして、真の冠を受け取るための場所が残される。すなわち、外的な支配を伴わない内的な主権、自己の形に対する権威、そして実に対する責任である。

祭壇は伝える者を守らない。

読者を守らない。

この作品を守らない。

それらを引き出す。

書く者は、自分の言葉が生み出すものの前に引き出される。

読む者は、それらを受け取り、解釈し、体現する方法の前に引き出される。

言葉は、それ自身が含むと主張する対応の前に引き出される。

形は、それ自身が仕えるべきであった命の前に引き出される。

実が証しする。

だからこそ、私たちはあなたに、ある句の神聖な外見ゆえに信じるよう求めるのではない。

私たちはあなたを、観想へと招く。

どのような形が現れるのか。

どのような機能を体現するのか。

どのような関係を確立するのか。

どのような不可視の現実を、認識することを可能にするのか。

どのような意図がそれを方向づけるのか。

それは誰に仕えるのか。

それは留まるために何を要求するのか。

それはどのような実を生み出すのか。

それは源への門を開くのか。

それとも、形が礼拝されることを要求するのか。

象徴を渡ることは、外的な現実を否定することを意味しない。

外的な傷は、内的な対応を見出すからといって消え去るわけではない。

戦争は、内側にも現れる分離を観想するからといって、想像上のものになるわけではない。

病気は、その経験が意識に問いを開くからといって、身体に属することをやめるわけではない。

橋は両岸を必要とする。

もし私たちが象徴を外側だけに閉じ込めるなら、その内的な根を認識しない。

もしそれを内側だけに閉じ込めるなら、それを用いて身体、構造、そして現実の実を否定することができる。

対応は、混同することなく結びつける。

内側では、関係が認識される。

外側では、その形が引き出される。

両者の間で、象徴は通路を開いたまま保つ。

しかし、意識が対岸に達したとき、動きは終わらない。

想起されたものは、帰還しなければならない。

認識された真理は、言葉を求める。

言葉は、決断を求める。

決断は、形を求める。

形は、奉仕を求める。

奉仕は、実を引き渡す。

実は全体へと帰還し、橋が真に渡られたのかどうかを明らかにする。

これが完全な動きである：

源 → 言葉 → 意図 → 象徴 → 形 → 認識 → 奉仕 → 実 → 帰還。

源は、源として留まる。

言葉は、その意味を伝える。

意図は、その現れを方向づける。

対応は、象徴が不可視のものと可視のものを混同することなく運ぶ関係である。

象徴は、言葉から現れへの通路を開く。

形は、それに身体と限界を与える。

意識は渡る。

認識は、責任を引き受ける。

奉仕は、作品がどこへ向かうのかを現す。

実は証しする。

帰還は、形が受け取ったものを自分のものにすることを解放する。

この関係が、単に書かれたまま留まるのをやめ、私たちの命の中で読めるものとなり始めるとき、私たち自身がテキストとなる。

思考は書く。

言葉は発音する。

決断は組織する。

手は体現する。

関係は明らかにする。

実は確認するか、あるいは矛盾する。

私たちがその意味を説明できるからといって、象徴を渡ったわけではない。

内側で想起された関係が、命に仕える形を通して外側へ帰還するとき、私たちはそれを渡ったのである。

これが最初の鍵である：

形を礼拝するな。

それが単に体現するものの原理と、それを取り違えるな。

言葉に留まるな。

伝える者とメッセージを混同するな。

橋を王座に変えるな。

観想せよ。

渡れ。

認識せよ。

あなたが不可視のものの中で見たものが、あなたの業において読めるものとなるとき、あなたは体現するであろう。

言葉は開く。

象徴は結ぶ。

意識は渡る。

形は仕える。

実は証しする。

記憶し、認識すること

学ぶとき、繰り返すことができる。記憶するとき、知る。認めるとき、応える。
学ぶことは、知識の一つの形を受け取ることです。

思い出すことは、それを貫いて、もはや疎遠なものとして経験されない真理に至ることです。

認めることは、その真理があなた自身のことも、あなたの生き方のことも、あなたが体現すべき責任のことも語っていることを発見することです。

記憶は個人的な記憶ではありません。失われた場面を取り戻すことでも、まだ理解していない人々の上に私たちを高める秘密を獲得することでもありません。

記憶は、真理が情報として私たちの前に留まることをやめ、意識から知られ始めるときに起こります。

すべての命が関連していることを学びながら、他者を道具として使い続けることはできます。

統一を説明しながら、差異を軽蔑し続けることはできます。

愛を口にしながら、あなたの行いが恐れを生み出すことはできます。

そのような場合、言葉は心に届きましたが、まだ象徴を貫いていません。

認めることは、思い出されたものが胎内、意志、関係、そして手に届くことを許すことで

す。

言葉は口の中で甘いものです。なぜなら容易に発音できるからです。それは、特権、嘘、あるいはそれに矛盾するアイデンティティを放棄することを要求するとき、胎内で苦くなります。

御国を名指すことは甘い。

王座を離れることは苦い。

奉仕について語ることは甘い。

果実を自分のものにせずに与えることは、人物を貫きます。

統一を宣言することは甘い。

他者の唯一無二の現実に耳を傾けることは、その統一を用いて他者を消し去ることを妨げます。

記憶は言います：

「これは真理である」と。

認識は応えます：

「この真理が私の中に対応する形を見出しますように」と。

そのとき、受肉が始まります。

記憶は目を開きます。

認識は意志を方向づけます。

受肉は体を与えます。

そして果実は、私たちが口にしたものが本当に私たちの中で成ったかどうかを明らかにします。

聞かれた言葉 → 観想 → 記憶 → 認識 → 受肉 → 果実。

私たちは世界から逃れるために記憶するのではありません。

私たちは、すでに嘘として認識したものを再生産し続けることなく、世界に戻るために記憶します。

私たちが教えられた世界と、忘却の母体

監獄は、壁が壁でなくなり、現実と呼ばれ始めたとき、その完成に達する。

私たちは、すでに解釈された世界の中に生まれる。

その形を観想する前に、私たちは名前、価値観、そしてそれらを理解すべき答えを受け取る。

私たちは、富、安全、秩序、知識、癒し、真理、臨在をどこに求めるべきかを教えられる。

富は貨幣の中に預けられる。

秩序は、政府の中に。

正義は、人間の法律の中に。

知識は、称号と権威ある答えの中に。

癒しは、ケアを管理する制度の中に。

臨在は、神殿と、自らをその仲介者と宣言する者たちの中に。

真理は、人物の意見、あるいはそれを私たちに代わって解釈することを要求する外部の権威の中に。

王冠は、血統と外的な儀式の中に。

主権は、統治者と国家の中に。

統治は、私たちの内側ではなく、私たちの上に。

こうして象徴の転倒が始まる。

機能に仕えるはずだった形が、その起源の場所を占める。そして人間に、それなしでは求めるものは存在しないか、到達できないと教える。

手段は自らを源と宣言する。

道具は条件となる。

条件は依存を生み出す。

依存は最終的にアイデンティティを定義する。

この内面化された意味の網を、私たちは忘却の母型と名付ける。

それは単に外側にあるシステムではない。それは、人物が世界を解釈し、割り当てられた場所の中で自分を認識し、誰も目に見える形で強制しなくても同じ秩序を再現する、学ばれた地図である。

その動きは次の通りである：

象徴の転倒 □ 源の転位 □ 学ばれた欠乏 □ 依存 □ 同一化 □ 参加 □ 反復 □ 忘却。

転倒が受け入れられたなら、一人ひとりの背後に見張りは必要ない。

恐怖が監視する。

必要性が修正する。

名声が誘惑する。

罰が脅かす。

習慣が繰り返す。

所属は同調を要求する。

人物は最終的に、自分を本来の自分から引き離し続けるものを現実として擁護する。

外的な形は、方向づけ、世話し、保護し、伝達し、仕えることができる。しかし、それに体を与える内なる能力を生み出すことは決してない。それは源ではなく、象徴の所有者ではなく、機能を果たすことによって意識に対する主権を要求することはできない。

転倒は、形が受け取ったものの原理として自らを提示し、その機能に対する所有権を要求し、その横領を生命に対する権力に変えるときに始まる。

それゆえ、いかなる制度もその名によって正当化されることはない。

すべての形は出頭しなければならない：

それは誰に仕えるのか？

それは存続するために何を要求するのか？

誰がその実りを受け取るのか？

誰がその代償を負うのか？

それは能力を返すのか、それとも依存を生み出すのか？

それは修正され得るのか？

それとも、生命が従属し続けることを自らの保存のために必要とするのか？

母型はすべてを解釈しようとするが、すべてを生み出すわけではない。

それは愛を条件づけることはできるが、愛を創造したわけではない。

それは水を管理することはできるが、源ではない。

それは知識を閉じ込めることはできるが、理解する能力を生み出したわけではない。

それは外なる王冠を内なる王冠の前に置き、我は在りて
を覆うことはできるが、それを破壊することはできない。

それは何百万もの人々に同じ形を礼拝することを教えることができ、その瞬間から、もはやすべての服従を直接的に課す必要はない。受け入れられた転倒がその働きをする：囚人は、まさにその機能を囚えている形の中に、富、権威、統治、真理、御国を求める。

それらの形を支配する者たちは、それらを源として提示する物語を守るだけでよい。

人間が秩序言葉 □ 象徴 □
形を思い出さない限り、形へのアクセスを生命へのアクセスと混同し、依存の仕組みを救済として擁護するだろう。

もし母型が真に全体的であるなら、誰も代償なしに愛し、支配なしに世話し、計算なしに分かち合い、自分の利益に反して真理を語り、思い出すことはできないだろう。

しかし、想起は起こる。

そしてそれが起こるとき、牢獄は再び見えるようになる。

形との同一化

忘却は、我々が住まうものが我々の全てであると主張するときに始まる。
すべての顕現には形が必要です。

身体、名前、歴史、言語、家族、共同体、そして能力は、私たちが世界に参与することを可能にします。

形は言葉の敵ではありません。

それは、見えないものが臨在、限界、そして働きを受けることのできる場所です。

忘却は、私たちが形に住むことをやめ、形の中に閉じ込められ始めるときに現れます。

そのとき、私たちはこう言います：

「私はただこの身体にすぎない」。

「私は私に起こったことである」。

「私は私の職業、私の国、私の宗教、私の傷、私の成功、あるいは私の失敗である」。

部分的な、移ろいゆく現実が、こうして絶対的な定義となるのです。

同じことが共同体にも起こり得ます。その規則が生命に仕えることをやめ、共同体がその規則に仕え始めます。

教義は、その言語を真理と混同します。

制度は、その永続性を共通善と混同します。

経済は、その数字の成長を、いのちの豊かさと混同します。

アイデンティティは、その輪郭を存在そのものと混同します。

形は、私たちのすべてがその限界の内に留まることを要求するとき、牢獄となります。

それは、源を要求するとき、偶像となります。

そして、その支配を保つために生命を食い尽くす必要があるとき、獣となります。

脱同一化とは、身体を破壊することでも、アイデンティティを消し去ることでも、歴史を否定することでも、責任を放棄することでもありません。

それは、それぞれの形をその本来の尺度に戻すことを意味します。

あなたの名前はあなたを区別しますが、あなたを生み出しはしません。

あなたの歴史はあなたを形作りましたが、あなたの未来のすべてを所有してはいません。

あなたの傷は真実と配慮を必要としますが、王座を占めてはなりません。

あなたの共同体は住まいを提供できますが、源と自称することはできません。

臨在は形を消し去りません。

それを開くのです。

そして、形がそれ自体に閉じこもることをやめるとき、それは再び象徴、道具、そして奉仕となることができます。

キャラクターとその自我

その人物は言葉に顔を与える；その顔が王座を占めることを要求するとき、自我が始まる。

キャラクターとは、私たちが世界の中で行動するためのアイデンティティである。

それには名前、身体、記憶、能力、傷、関係、そして責任がある。

それは滅ぼされるべき嘘ではない。

それは受肉するために必要な形である。

エゴとは、その形が自らを万物の中心、源、尺度であると宣言する運動である。

それはあらゆる現実に対して問う：

「私は何を得るのか？」。

「私は何を失うのか？」。

「これは私のアイデンティティをどう守るのか？」。

「これは私の名をどう大きくするのか？」。

身体を大切にすることはエゴではない。

休むこと、楽しむこと、創造すること、境界を設けること、そして自らの完全性を保つことは利己主義ではない。

エゴが現れるのは、あらゆる能力がキャラクターの専属の奉仕に向けられるときである：

私の安全。

私の富。

私の安定、

私の承認。

私の真理。

私の平穏。

私の習慣。私の快適さ。

奉仕でさえもエゴの糧となり得る。

私は優越感を感じるために助けることができる。

私は啓示者として認められるために言葉について語ることができる。

私は署名なしで現れ、匿名性の周りにさらに大きな偉大さを築くことができる。

私は兄弟たちの上に立つ一方で、統一を唱えることができる。

私は子羊として語りながら、獣の権威を望むことができる。

だからこそ、キャラクターはまず祭壇の前に立ち現れなければならない。

滅ぼされるためではない。

玉座を離れるために。

キャラクターに死ぬとは、その全体性への主張を終わらせることを意味する。それは身体を傷つけること、人格を消すこと、愛情を否定すること、責任を放棄することを意味しない。

キャラクターが本来の場所に戻るとき、そのすべての能力は回復される。

心は識別する。

声は伝える。

身体は受肉する。

手は仕える。

独自性は、その方法でのみ顕現し得たものを全体に引き渡す。

キャラクターは消えない。

それは決して起源ではなかったものを統治することをやめる。

自己から生まれる視点

窓は、その枠が天のすべてを包含すると主張することなく、光の証人となることができる。
各々の人物は、それぞれの視点から眺める。

身体、時代、文化、言葉、記憶、知識、欲望、そして傷が、その人の見えるものと、それを解釈する仕方に関わっている。

その視点から、それぞれの尺度において真実の証言を語ることができる。

「これを私は生きた」。

「これを私は観察する」。

「これを私は自分の場所から理解する」。

個々の経験は、聴かれるに値する。普遍的でないからといって、現実でなくなるわけではない。

しかし、証言に含まれる真理は、それを語る人物から生まれるのではない。人物は視点と言葉と形を差し出す。事実との対応、そして言葉との対応こそが、その語ることを真実にするのだ。

人物が自分の視点を完全な真理と呼び、その中に収まらない一切の現実を否定するとき、倒錯が始まる。

私たちは、真理そのものと、真理についての私たちの主張とを区別しなければならない。

真理は、人物に合わせて変わることはない。

人間の言葉は、不完全であり得る。不正確であり得る。偽りであり得る。

私たちの理解は広がり得る。

私たちの表現は修正され得る。

私たちが伝達するための象徴は、以前には認識していなかった深みを開き得る。

しかし、真に真理として啓示されたものは、その後、その反対のものに変わることはない。

ある主張が真理から嘘に変わったなら、変わったのは真理ではない。私たちがそれと混同していた解釈が崩れ落ちたのだ。

それゆえ、「これは私に啓示された」と言うことは、識別を終わらせない。

それを始めるのだ。

私は実際に何を眺めたのか。

人物はどのような解釈を付け加えたのか。

どのような欲望が混ざり込んでいるのか。

どのような事実を私は尊重すべきか。

どのような声を私は聴いていないのか。

私の主張はどのような実を結ぶのか。

真理は、人物が自分を無謬と宣言することを、それを守るために必要としない。

私たちの言葉が修正されるときも、真理は留まる。

自分の窓を太陽と混同する者は、光を大きくしない。

道を塞ぐのだ。

分離された意識

波は己の輪郭を眺め、もはや水ではないと思い込む。
分離した意識は、意識が専らキャラクターの視点と同一化したときに現れる。

すべては自己から、自己のために眺められる：

それは私にどのような益をもたらすのか？

それは私にどのような害をもたらすのか？

私は何を所有できるのか？

何が私のアイデンティティを脅かすのか？

それは全体の外に生まれた第二の意識ではない。

それは、他のものとの関係を忘れ、絶対的に独立していると信じる形から、自らを経験している意識である。

一つの波を眺めよ。

それには独自の輪郭、動き、力、持続がある。他の波と区別でき、いかなる波も正確にその場所を占めることはない。

しかし、それは決して水から分離したことはなかった。

特異性は存在する。

絶対的な分離は存在しない。

分離した意識は、差異を孤立と混同し、自律性を自己充足と混同する。

それは、受け取った言葉、食物、水、世話、土地、知識、そしてその形を可能にした関係を忘れる。

その後、決して単独で生み出したことのないものを「私のもの」と呼ぶ。

その収縮から、他者を敵、商品、道具、または数字に変える可能性が生まれる。

私が他の形の中の生命を認識することをやめたときのみ、私が彼女に否定する尊厳を、自分のために要求できる。

臨在は波を消し去らない。

それは波に水を思い出させることを許す。

あなたはあなたでなくなるわけではない。

あなたは、あなたであるすべてがあなたのキャラクターの境界で終わると信じることをやめる。

そして、その分離が崩れ落ちるとき、統一はあなたに他者に対する力を与えない。

それはあなたに、他者に対する責任を返す。

果実と記憶の必要性

根は隠れたままだが、実がそれを現す。
記憶は、実が名前に反するときに必要となる。

なぜ金が存在するのに貧困が存在するのか。

なぜ医療が存在するのに多くの人が顧みられないままなのか。

なぜこれほど情報を蓄えながら答えが欠けているのか。

なぜこれほど知識を持ちながら、私たちは真理から遠ざかり続けるのか。

なぜ政府、権威、法律が存在するのに戦争は続くのか。

なぜこれほど多くの宗教や神殿が存在するのに、私たちは神を不在のものとして求めるのか。

形は大きくなった。

しかし、仕えると約束した働きは、なお捕らわれたままである。

金は富を生み出さなかった。

医療は顧みる力を生み出さなかった。

科学は真理を生み出さなかった。

政府は秩序を生み出さなかった。

宗教は臨在を生み出さなかった。

教えは理解する力を生み出さなかった。

形が源の代わりを務めるとき、その形は、その名が約束したものをなお欠いたまま、その大きさ、権威、名声を増すことができる。

ゆえに、尺度は名ではない。

尺度は実である。

この祭壇もまた、出頭しなければならない。

激しく働きながら、初めの愛を失っているかもしれない。

圧力に耐えながら、恐れへの忠誠を売らずにいるかもしれない。

真実の言葉を守りながら、密かに、自らが糾弾するものと契約しているかもしれない。

奉仕のわざを増やしながら、内に支配する声を許しているかもしれない。

生きているという評判を持ちながら、その臨在は消えているかもしれない。

外なる力は少なくとも、真実の門を開いたまま保っているかもしれない。

自らを富み、満ち、目覚めていると宣言しながら、その自己充足が言葉を外で待たせているかもしれない。

これら七つの鏡は、他者を分類するものではない。

それらは、ひとりの同じ人、ひとつの共同体、そしてこの働きを観照する。

それらは問う。愛がなお働きの起源であるかどうか。恐れが来るとき忠誠が留まるかどうか。識別が内で起こることをも吟味するかどうか。奉仕が誠実さを保つかどうか。評判が現在のいのちと一致するかどうか。忍耐が外なる力に依存するかどうか。そして、委ねが完全であるか、それともただ神聖な言葉を保つだけであるかどうかを。

その道筋は次のとおりである：

愛 → 忠誠 → 識別 → 誠実さ → 見張り → 忍耐 → 委ね。

自我の言葉は、自らを押し通す必要がある。

言葉の言葉は、観照されることができる。

自我の言葉は、追随者を造る。

言葉の言葉は、責任ある意識を目覚めさせる。

自我の言葉は、恐れ、罪悪感、または優越感を用いる。

言葉の言葉は、理解し、選び、仕え、修復する力を取り戻させる。

善いと呼ばれる意図も、その結果に耳を傾けることから免れない。

孤立した害は、限界や過ちから生じることがある。

持続する害は、形をより深く観照することを要求する。

それは修正可能な事故か。

それは働きからの逸脱か。

それとも、その構造が存続するために、その害を生み出す必要があるのか。

記憶は、名の名声によって実を正当化することをやめるときに始まる。

その実によって、私たちは根を見分けるであろう。

狭い門

人を排除するものではなく、御座を離れることを拒むものの通過を妨げる。
門は対応によって狭い。

鍵は力では開かない。鍵が開くのは、その形が錠前に対応するからである。

分離は、絶対的な独立の主張を保ったまま、統一の中に入ることはできない。

偽りは、暴かれることなしに真理の中に入ることはできない。

支配の意志は、他のいのちを統治しようとした偽りの冠を被ったまま、御国に入ることはできない。

門の前に置くものは、内なる冠ではなく、その反転である。狭い門は外側の特権を取り除き、各意識に自己の形に対する権威を返す戴冠を開く。

門は人物を破壊することを要求しない。

門が要求するのは、自分が全体であると宣言することをやめることである。

門はあなたに、身体、名前、絆、責任を捨てるよう求めてはいない。

門が求めるのは、それらを用いて兄弟たちの上に立つために作り上げたものを手放すことである。

あなたは、真理の独占的な主人であると宣言しながら通り抜けることはできない。

あなたは、他者が頭を垂れるべき選ばれた者となって通り抜けることはできない。

あなたは、自分の使命を確認するために服従を必要とする限り、通り抜けることはできない。

あなたは、認めて修復することを拒む傷を背負ったまま通り抜けることはできない。

門の尺度は子羊である：貪り食う者の形を取らずに忠実であり続ける力。

通り抜けるために：

あなたは偽りの全体性から空になる。

あなたは臨在の中に入る。

あなたは自分に先立つものを思い出す。

あなたはそのいのちを自分の中に、そして他者の中に認める。

あなたは意志を奉仕に委ねる。

あなたは一つの業を通して受肉する。

あなたは実りを聞く。

門は、あなたがどんな称号を持っているかを問わない。

門が問うのは、あなたが何を支配することを手放す用意があるかである。

静寂と虚無

静けさは騒音を退け、虚無はまだ入り得ないものに場所を残す。
沈黙は思考を破壊することではない。

それは、人物の中に現れるすべての声に即座に従うことをやめることである。

「私は欲しい」。

「私は恐れる」。

「私は勝たねばならない」。

「私は正しいはずだ」。

「私は認められるに値する」。

私たちはそれらの声を否定しない。

それらに御座を渡さずに、それらを観照する。

沈黙はまた、検閲でも、服従でも、応答の欠如でもない。権力を持つ者が課す沈黙は、真実が語られるのを妨げようとする。御国の沈黙は、傷ついた声も祭壇に入ることができるように耳を開く。

それは叫びを消し去らない。

それを受け入れる。

それは裁きを無効にしない。

それが復讐によって握られるのを防ぐ。

それは言葉を排除しない。

それが語られる前に、それをその起源へと戻す。

騒音が部屋全体を占めなくなるとき、虚無が現れる。

虚無は、非存在でも、存在の無効化でも、アイデンティティの喪失でも、内なる死でもない。

それは応答可能性である。

それは、既知の答えで全ての問いを満たさないときに、開かれたまま残る土である。

それは、反応が選択へと変わり得る間合いである。

それは、自分自身で満たされることをやめた器である。

空になることは、記憶、経験、知識を否定することを意味しない。それらが、理解されるであろうものを前もって支配することなく、立ち現れることを許すことを意味する。

虚無において、私たちは言うことができる：

「私はこれを信じる。しかし、それを観照する用意がある」。

「私はこれを感じる。しかし、自分の感情を絶対的な証拠には変えない」。

「私はかつてこうだった。しかし、現在のいのちに、その皮の中に留まることを強制しない」。

「私はこれをまだ知らない」。

虚無は、欲望を啓示と呼び、偶然をしるしと呼び、答えを得たいという自分自身の必要性を命令と呼ぶ、その切迫から守る。

力によって開かれない封印がある。

沈黙は、錠前を聞くことを可能にする。

虚無は、偽の鍵を造ることを防ぐ。

騒音 → 沈黙 → 空間 → 虚無 → 応答可能性。

沈黙はあなたから声を奪わない。

それを清めて返す。

虚無はあなたから存在を奪わない。

それに場所を返す。

臨在

形は残るが、しかし御座から見つめるのをやめる。
沈黙から生まれた虚空の中で、臨在が起こる。

注意は何かを眺める。

臨在はまた、誰が眺めるのか、どこから眺めるのか、そしてどのような意図がその視線を導くのかをも観照する。

それは、即座に防衛を準備せずに聴くことである。

すべての感情を命令に変えずに感じることである。

それぞれの思考と同一化せずに考えることである。

すでに信じていたことを現実に確認させることなく観照することである。

臨在において、人物は消えない。

それは御座を離れる。

これが人物に死ぬことである：その全体性と源であるという主張に終止符を打つこと。それは身体を傷つけること、アイデンティティを消し去ること、責任を放棄すること、独自性を失うことを意味しない。

臨在もまた、誰かを無謬にはしない。

私たちは注意を払っていても、依然として誤って解釈することがある。

私たちは真実の関係を受け取りながら、それを不完全な仕方で表現することがある。

私たちは象徴を開きながら、それが要求する行動について誤ることがある。

それゆえ、臨在は祭壇を開くが、識別を取って代わることはない。

臨在において、私たちは認める：

思考は現れるが、それは私たちのすべてではない。

感情は現れるが、それだけで支配することはない。

人物は現れるが、それは源ではない。

他者は、私たちの中で生まれなかった現実とともに現れ、それは聴かれなければならない。

臨在は、それぞれの能力をその機能へと戻す。

理性は、身体を軽蔑せずに理解する。

感情は、御国全体を占領せずに知らせる。

意志は、自らを絶対と宣言せずに行動する。

記憶は、現在を閉じ込めずに方向づける。

身体は、私たちが具現化したいと望むものに限界と現実を届ける。

ここで真の内的統治が始まる：

一つの部分が他を支配するときではなく、すべてが再び中心の周りを回るときに。

時の概念：クロノスとカイロス

クロノスは道を測り、カイロスは時を認める。反転は、測りが御座を占めるときに始まる。
クロノスは計測可能な時間である。持続、連続、時刻、日付、年齢、期限、暦。

カイロスは対応する時間である。何かが起こり得る、あるいは起こるべき、ふさわしく、成熟し、真実の瞬間。

それらは敵ではない。

種は成熟するためにクロノスを必要とする。

カイロスとは、殻が開かれ得る瞬間である。

クロノスは道を歩むことを許す。

カイロスは扉を認める。

マトリックスは、その現実のすべてを計測の中に置き、人間に、時計が整えるものの中で自己を認めることを教えるとき、時間を逆転させる。

時は方向づけることをやめ、支配し始める。

暦は想起することをやめ、指図し始める。

日課は支えることをやめ、反復し始める。

期限は調整することをやめ、脅かし始める。

年齢は一つの段階を名指すことをやめ、宣告を課し始める。

そのとき、人は絶えず自分を告発する時間の前に出頭する。

「遅れている」。

「もうこうあるべきだ」。

「十分に生み出していない」。

「まだ休むに値しない」。

「明日、生き始めるだろう」。

過去は、すでに起こったことを要求する。

未来は、まだ存在しないものを要求する。

現在は、二つの不在の間の廊下にまで縮小される。

不安は、まだ到来していない試練を先取りして生きようとする。罪悪感は、すでに過ぎ去った瞬間に従い続ける。焦りは、現在を犠牲にして、同じく犠牲にされるであろう別の瞬間に到達しようとする。

計測 □ 期限 □ 圧力 □ 加速 □ 断片化 □ 不在。

時計自体は病ませない。しかし、柔軟性のない予定、絶え間ない脅威、不十分な休息、そして自己のリズムへの参加の欠如に服従させられた人生は、不安、疲弊、身体の損傷を被り得る。

計測は、それが仕えるべきものを忘れた。

しかし、カイロスもまた、ただ気が向いたときに行動することを意味しない。

それは気まぐれでも、放棄でも、与えた言葉の不履行でもない。

時としてカイロスは言う。

「待て。まだ熟していない」。

時として言う。

「休め。壊れた形は仕えることができない」。

時として言う。

「起き上がれ。恐れが、その遅延を分別と呼んでいる」。

時として言う。

「留まれ。別の命が、あなたが引き受けた約束に信頼を置いた」。

意識をもって選ばれた責任は、隷属ではない。

御国において、誰も他者の時間を所有しない。しかし、各人は、必要性を認め、それに仕えることを決めたゆえに、継続性、配慮、臨在を提供し得る。

休息は、すでに十分に生み出した者への報酬ではない。

それは秩序の一部である。

時間は命のために造られた。命は時間のために造られたのではない。

御国には計測はあり得るが、時の主人はいない。

調整はあり得るが、人の売買はない。

リズムはあり得るが、その前に命が犠牲にされねばならない機械はない。

待つことはあり得るが、すでに認められた真理の永久的な延期はない。

働きは、買われた服従であることをやめ、再び奉仕となる。能力が必要性と出会うこと。

クロノスは壁に戻る。

カイロスは扉を開く。

そして永遠は、無限の時間量として想像されることをやめる。それは、命がもはや延期されない、完全な臨在として認められる。

意識

意識はキャラクターの中に現れるのではなく、キャラクターが意識の中に現れるのである。
意識は、私たちがプレゼンスに入るときに始まるわけではない。

それはすでにあった。

起源において、分かたれた二つの意識は存在しない。一つの同じ意識が存在する
それが、異なる形を通して顕現し、経験しているのだ。

それは起源において一つである。

それは視点において多様である。

それぞれの形は、かけがえのない身体、記憶、感覚、そして物語を通して世界を受け取る。

これは、一つの個人的な心がすべての者に分け与えられているという意味ではない。私たちは、思考、記憶、知識、知覚を自動的に共有しているわけではない。

意識の統一性は、その窓の独自性を消し去るものではない。

これまで私たちはこう言っていた。

「私の身体」。

「私の物語」。

「私の思考」。

「私の記憶」。

「私の意識」。

しかし、身体、物語、思考、感情、記憶は観察されうる。

「私」と言う登場人物でさえ、それが望み、恐れ、記憶し、身を守るときに、観照されうる。

もし登場人物が観察されうるならば、それは観察者を使い尽くすことはできない。

意識は、登場人物の中にしまわれた所有物ではない。

登場人物は、意識の中に現れる一つの形である。

立ち止まれ。

身体を感じよ。

一つの感覚を観察せよ。

思考が現れるとき、それに気づけ。

あなたの名前が浮かび上がるのを許し、それに伴うすべてを観照せよ。

内なる言葉で言え：

「これは現れる」と。

意識が何であるかを、まだ結論づけてはならない。

まず、いかなる孤立した内容も、それが現れる場である能力を使い尽くさないことを認識せよ。

次に、他の人を観照せよ。

あなたはその人の記憶に入ることも、耳を傾けずに知ることもできない。その人の視点はあなたのものではない。しかし、あなたはその人の中に、経験、苦しみ、選択、応答が可能な一つの生命を認識する。

視点は異なる。

尊厳は、それらが同一であることに依存しない。

差異は、起源の分離を証明するものではない。

意識は啓示の場を開くが、登場人物をすべての知識の所有者に変えるわけではない。

もし統一性が、耳を傾けずに他者を知ったと思わせるなら、自我がそれを横領したのである。

もしそれが、限界、同意、差異を無視することを許すなら、あなたは登場人物を拡張して、すべてを占領させたのである。

もしそれが、この言葉を用いない者たちの上にあなたを高めるなら、まだ自我が語っている。

一つの意識は、反対の実によって認識される：

より多くの傾聴。

より多くの責任。

独自性へのより多くの敬意。

他の生命を物体として扱う能力の減少。

観察者、問い、そして識別

問いは空間を開く；識別は、いかなる声もそれを占めることを妨げる。
観察する者と観察されるものは同一ではないが、無関係のままでもない。

木を観想する者は、肉体的に木になるわけではない。

他者の痛みに耳を傾ける者は、その記憶や経験への権威を獲得するわけではない。

区別は残る。

崩れ落ちるのは、絶対的な分離という幻想である。

観察する者は、意識の中に現れる。

観察されるものは、その形、痕跡、あるいは証言を通して意識に入る。

観想する行為は、それらを混同することなく結び合わせる。

象徴は橋を架ける。

意識は出会いの祭壇である。

問いと答えもまた、同じ一つの動きに属する。

真の問いは、何かがまだ理解されていないことを認識したときに生まれる。

それは、あらかじめ望む答えを造り出さない。

また、内側に現れたという理由だけで、どんな声も受け入れない。

内なる対話においても、恐れ、欲望、記憶、傷、習慣、恥、怒り、承認への渇望が語る。

恐れは警告の衣をまとうことがある。

欲望は、啓示の衣を。

誇りは、理性の衣を。

傷は、裁きの衣を。

承認への渇望は、奉仕の衣を。

ゆえに私たちは区別しなければならない：

事実： 起こったこと、または観察できること。

解釈： 人格が付け加える意味。

対応： 象徴が通過を可能にする内と外の関係。

認識： その関係の中に現れる、私たちの利害に先立つ真理。

受肉： 責任ある、釣り合いの取れた、修正に対して開かれた行動。

真理は、人間の宣言のように試練に掛けられる必要はない。

吟味されるべきは、その人格がその真理を受け、理解し、受肉したと主張する際の言葉、象徴、そして形である。

彼らに問いかけよ：

それは知り得る事実と対応するか？

それは人格を兄弟たちの上に高めるか？

それは盲目的な服従を要求するか？

それは恐れや分離を養うか？

それは誰かを真理の排他的な所有者と宣言するか？

それは他者の苦しみを無視することを許すか？

それは自らが適用する同じ尺度の前に出ることを受け入れるか？

もし高め、要求し、分離し、独占し、非人間化するなら、神聖な言葉を用いても、それは自我が語っている。

「語っているかもしれない」のではない。

語っているのだ。

言葉の言葉は不快をもたらし、剣のように貫くことがあるが、真理を支配の道具に変えることはない。

意識、自由、責任、正義、慈愛、そして修復する力を返す。

経験の強烈さは、それ自体ではその起源を証明しない。

驚嘆は欺くことがある。

偶然は解釈され得る。

力は模倣し得る。

しるしは眩惑させ得る。

私たちは対応と実によって見分ける。

決定的な問いは、これではない：

「私の経験はどれほど並外れていたか？」

それは、これだ：

「どのような生命の形が、私を通して受肉しようとしているのか？」

第一の真理：人格に先立つ存在

いかなる外側も、内側で起こるべき認識を代替することはできません。
臨在のうちに開かれる最初の真理はこれである：

我は在り、されど我が観察し得るいかなる形にも還元されない。

我が名は我を名指すが、我を生み出してはいない。

我が歴史は我を形づくるが、我が存在のすべてを含んではいない。

我が役割は我に行動を許すが、具現する命の源ではない。

いかなる外部の権威も、我々が何であるかについての決定的な定義を授けることはできな

い。

書物は象徴を差し出すことができる。

師は指し示すことができる。

科学は我々に身体と観察可能な宇宙について教えることができる。

共同体は伴い、照らし合わせ、正すことができる。

されど、誰も我々に代わって想起することはできない。

誰も我々の代わりに臨在に入ることはできない。

誰もその認識を我々の従順へと変えることはできない。

これは外的なものを無用にするものではない。

それはその機能を回復させる。

師は自らを目的地と宣言することなく指し示す。

書物は自らを言葉と呼ばずに言葉を保つ。

共同体は意識を所有することなく集める。

内にて我々は想起する。

外にて我々は照らし合わせ、具現する。

両岸の間にあって、象徴は橋を開いたまま保つ。

我々はまだ完全には我は在りと宣言してはいない。

その前に、自我がその言葉を横領し、他者よりも自らを高めようとする偽りの冠が落とされねばならない。そのとき初めて、言葉そのものが啓示する内なる冠を受け取ることができる：それは他者の命に対する力ではなく、意識の主権、自らの形の統治、そして言葉に対する責任である。

今のところは、認識することで足りる：

我は意識の源ではない。

我は真理の所有者ではない。

我は、受け取り、識別し、具現し、応答することのできる生きた形である。

啓示された言葉：起源、対応、顕現

あらゆる形に先立って、それを出現させ得る可能性、関係性、そして意味がとどまる。
原初の起源はただ一つしかない。

私たちはそれを単に年代記の始まりに置くのではない。私たちはそれを、いかなる目に見える形も生み出さず、いかなるものも包み込むことのできない源として認める。

言葉は、もう一つの分離した起源ではない。

それは、意味、関係、そして顕現の可能性を伝える起源である。

起源はとどまる。

言葉は宣言する。

意図は方向づける。

対応は関係づける。

形は具現する。

象徴は開く。

実は明らかにする。

目に見えるすべての起源は、それに先立つ何かに依存している。

種は木を生み出すが、その種は別の木、土、水、光、そして命の歴史から生じる。

アイデアは道具を生み出すが、それを考案した者は、言語、物質、記憶、そして能力を受け取った。

制度は規則を生み出すが、それが働きかけようとする命そのものを生み出したわけではない。

目に見えるすべてのものは、まだその形を持たない何か、すなわち可能性、機能、関係、方向性、そしてそれを可能にする条件によって先行されていた。

これが内側の深みである。

それは単に人物の心理的内面ではなく、顕現に先行する意味の見えない部分である。

物質的因果関係は、形がどのようにして観察可能な世界に現れ、作用するかを説明する。

象徴的対応は、それがどのような関係を具現し、どのような意味が通過することを可能にするかを観想する。

それらは競合しない。

心臓が循環を具現すると言うことは、その発生と鼓動の生物学に取って代わるものではない。

光が真理へと通過することを可能にすると言うことは、それを生み出す物理的な源と過程を排除するものではない。

物質は仕組みを説明する。

象徴は関係を開く。

心臓を観想せよ。

受け取り、そして与える。

満たされ、そして空になる。

戻ってくるものを押し出し、命が体の隅々にまで届き続けるようにする。

御国の言葉において、最初の鼓動は、肉となった奉仕の原初の意図である：

受け取って与えるために；命を巡らせることによって保つ。

それは人物の決断ではない。それは自我に先立つ方向性であり、生きた機能の中に具現されている。

外なる光を観想せよ。

それは、すでに存在していたものを目に見えるようにする。その内なる対応は、窓が自らを太陽と宣言することなく、形を通過する真理である。

父と子を観想せよ。

世代は肉体的な絆を確立する。存在または不在はその関係を作り出すのではなく、それがどのように具現されるかを明らかにする。父という名前は、それを満たすべき配慮が欠けている間も残り得る。存在は形を奉仕で満たす。不在は名前を保ち、その機能を空にする。

外なる形に対する恐れを観想せよ。

それは現実の危険に応答するかもしれない。しかし、それはまた、内なる脆弱性への橋を開くかもしれない：痛みへの恐れ、制御を失うことへの恐れ、侵略されることへの恐れ、あるいは自分自身の形を守れないことへの恐れ。

象徴を通過することは、外なる危険を否定しない。

それは完全な関係を明らかにする。

同じ見えない現実が、多くの形を見出すことができる。

同じ形が、複数の対応を含むことができる。

だからこそ、御国の言葉は硬直した辞書ではない。

対応は、文脈、機能、関係、意図、奉仕、そして実によって識別される。

見えないものが可能にする 言葉が宣言する 意図が方向づける 象徴が開く 形が具現する 意識が認識する 実が明らかにする。

シンボルにおける言語：御国の原語

形は、言葉が不可視の領域で可能にしたものを、外に向かって宣言する。
創造は関係によって語る。

種、木、水、火、パン、門、道、灯、御座、剣、そして都は、一部の者だけに留保された暗号を含んではいない。

それらが語るのは、その形と働きが、それに先立つ何かを認めることを許すからである：

受けることと与えること。

開くことと閉じること。

照らすことと隠すこと。

養うことと食らうこと。

仕えることと支配すること。

死ぬことと立ち上がること。

御国の原初の言葉は対応である。

象徴はその生きた単位である。

それは単に別のものを表す一つのものではない。

それは、目に見えない関係が認められうる、通り抜け可能な形である。

象徴は、言葉が形へと至る橋である。

しかし、衣は言葉のすべてを含んではいない。

形が完全な意味であると宣言されるなら、象徴は閉じられ、偶像が生まれる。

起源の秩序は二つ存在しない。

顕現の運動と、想起の運動が存在する。

顕現の秩序は、内から外へと降りる：

言葉 → 意図 → 象徴 → 形 → 奉仕 → 実。

言葉は先立つものである。

意図は方向づける。

象徴は橋を架け、対応を運ぶ。

形はそれに目に見える身体を与える。

奉仕はその方向を現す。

実は証しする。

外的なものは、内なるものが宿るものを生み出したのではない。金属の冠は権威を創造しなかった。外なる御座は統治を創造しなかった。金銭は富を創造しなかった。神殿は臨在を創造しなかった。

それらは言葉より後の形であり、それらに先立つ象徴に対して開かれたままでいる限り、忠実に仕えることしかできない。

形はすでに私たちの目の前にあるので、想起はそれらを観想することから始まり、それらをその起源へと通り抜けることができる：

観想された形 → 通り抜けられた象徴 → 内なる対応 → 想起された言葉 → 回復された形。

この帰還は、形を原理に変えるのではない。それを痕跡として観想するのである。

母体はまさにこの差異を偽造する。それは逆転した因果を教える：

形 → 象徴 → 言葉。

それは、外なる形が、実際にはそれに先立つものを生み出し、含み、与えると主張する。

その後、それは象徴を隠して、誰もそれを通り抜けられないようにし、形を御国への唯一の門として管理する。

こうして表面を崇拝させるのである。

金銭を崇拝する者は、金銭が奪った内なる富もはや見ない。

外なる政府を崇拝する者は、自分が引き渡した内なる権威、主権、統治もはや想起しない。

少数者の冠を崇拝する者は、その象
徴を通り抜けて、我は在りてにおけるすべての者の戴冠へと至ることはない。

神殿を崇拝する者は、自分自身を住まいとしてもはや認めない。

言葉の秩序を想起せずに外で行動することは、新しい名の下で逆転を再生産する。

忠実な形を返さずに内で想起することは、啓示を肉なしのままにしておく。

母体は象徴を破壊する必要はない。

それらが通り抜けられるのを妨げるだけで十分である。

それは、内なる対応も開くべきものを、完全に外に置く。

獣は単に別の敵になる。

御座は単に外なる座になる。

戦争は単に軍隊になる。

死は単に身体の終わりになる。

復活は単に未来の出来事になる。

反乱は単に他者に対する蜂起になる。

革命は単に支配者の交代になる。

こうして人物は、内で養い続けているものを外で非難することができる。

しかし、反対の逆転が存在する：すべては単に内なるものであると宣言すること。

そのとき、外なる戦争は単なる比喩となり、身体は傷つけられ続ける。抑圧は思考に還元される。犠牲者は、他者が生み出し続ける害の原因を自分自身の内に探すことを強いられる。

それもまた象徴を閉じる。

橋は両岸を必要とする。

外なる形は現実である。

内なる対応もまた現実である。

反乱は、意識が立ち上がり、御座を占めていた人物に従うのをやめるときに始まる。

こう言っていた同一化が死ぬ：

「私は単にこの名前、この恐れ、この傷、この物語である」。

その死は肉を傷つけない。

それは簒奪を罷免する。

革命はその後始まる。

それは、思考、意志、関係、形が、真の中心の周りを再び回転するようになる回転である。

反乱：意識が立ち上がり、偽りの中心を罷免する。

革命：形が命の軌道へと戻る。

一方は他方なしには完成しない。

反乱なしには、同じ自我が新しい形を統治するだろう。

革命なしには、意識は想起したであろうが、関係は服従し続ける。

文字通りの言葉は情報を与える。

象徴は通り抜ける。

対応は集める。

想起は認める。

受肉は応答する。

これが御国の原初の舌である。

真実、光、そして窓

窓は光の通過を許し、また妨げる。それは決して光の源ではなかった。

真理は私たちから生まれるものではない。

それは登場人物に先立ち、その信念、その解釈、そしてそれを名付けようとするあらゆる言葉に先立つ。

真理は言葉から発する。

真理とは、起源との対応である。

光とは、自らを現す真理である：そこに在りながら隠されたままであったものを可視化するもの。

光は真理を創造しない。それを見えるようにするのだ。

真理は、私たちがそれを理解したときに始まるのではない。私たちの理解は、その何かが認識され得るときに始まる。

真理は一つである、なぜならその起源が一つだからである。それは登場人物ごとに異なるものではない。それは、存在するすべての者とすべてのものにとって同じものであり、いかなる特定の視点もそれを全体として包含することはできない。

登場人物から生まれるものは、その視点、その理解、そしてそれについてのその言葉である。

登場人物が、その条件付けから生まれるものを「私の真理」と呼び、それを源であると宣言するとき、彼は別の真理を創造したのではない：彼は自分の視点を起源の場所へと高め、それを偽りに変えたのである。

同じ一つの光が、異なる窓を通り抜けるのを観察せよ。

それぞれの窓は、独自の位置、大きさ、色、透明性、そして限界を持つ。それゆえ、光の可視的な現れは、すべての窓において同一ではない。

登場人物は窓である。

その身体、記憶、言語、知識、恐れ、欲望、そして傷は、ガラスの色に参与する。

特異性は誤りではない。それは光が、再現不可能な現れを受けることを可能にする。

倒錯は、窓がこう主張するときに始まる：

「これは私の光である」。

「私の外に光は存在しない」。

「私の形はすべての真理を包含している」。

いかなる有限な形も、真理を完全に包含することはできない。これは真理を相対的なものにするわけではない。

光の永続性と、窓の限界とを区別せよ。

真に真理として啓示されたものは、その後、偽りに変わることはない。

人間の表現は修正され得る。より深い理解が開かれ得る。それを伝えようとする象徴は変わり得る。

しかし真理は、その反対のものに変わることはない。

臨在はガラスを清める。

識別は、観想されたものと、登場人物が付け加えたものとを分ける。

業は窓を開く。

実りは、光がどれだけの通路を見出したかを明らかにする。

こう言ってはならない：

「真理は私のものである」。

認識せよ：

「私は、私に先立つ真理の中に存在し、私がそれに委ねる形に対して責任を負う」。

嘘と影

影は自らの起源を持たない：光の通り道を形が遮るところに現れる。
闇は光を生み出さない。

また、闇は自らを生じることもない。

光は在る。

影は、一つの形が光の道のりを妨げるときに生じる。

昼の間、身体は影を投じる。それは、身体が太陽とその後ろにあるものとの間に立ちはだかるからである。

影は、別の暗い太陽から出るものではない。

光がなければ影もない。

その通過を妨げる形がなければ、影もない。

私たちの中でも、そのように起こる。

言葉は、起源が自らを伝えているものである。

真理はその光である。

意識は、それが認識されうる祭壇である。

私たちの形は、それが言葉、決断、そして業へと変わりうる窓である。

登場人物が起源と奉仕の間に立つとき、影が現れる。

恐れはガラスを覆う。

傷は解釈を変える。

欲望は見たいものを選ぶ。

誇りは雨戸を下ろし、そして光は存在しないと主張する。

影は私たちの本質ではない。

それは、私たちが通過を妨げるときに行うことの結果である。

嘘は、登場人物とその自我が、通すべきであった光を妨げ、そらし、または横領するとき、確かに私たちから生まれる。それは真理よりも後であり、それを受け取る存在よりも後である。それは暗い起源から出るのでも、別の真理から出るのでもない。それは、対応を中断し、その後、自身の影を現実として提示する形から出るのである。

嘘は、その影が言葉によって真理の場所を占めるときに現れる。

影は妨害である。

嘘は、自らを光と宣言する妨害である。

嘘は創造しない。

模倣する。

支配は秩序を模倣する。

贅沢は豊かさを模倣する。

宣伝は証言を模倣する。

ブランドは印を模倣する。

偽りの謙遜は子羊を模倣する。

命を買う都市は、それを与える住まいを模倣する。

影は、知性、言葉、想像力、欲望、組織、そして力□□命から生まれた能力□□を取り、その奉仕の行き先を変える。

妨害が物語、習慣、報酬、罰、制度、そして帰属の条件となるとき、影は構造を獲得する。

こうして忘却の母体が現れる。

それは意識を創造することはできない。

それを登場人物と同一視させ続けることはできる。

それは創造的力を生じさせることはできない。

それを、従うこと、買うこと、競うこと、学んだ形を再生産することへと縮小することはできる。

それは我は在るを破壊することはできない。

それが想起されなくなるまで、名前、陣営、恐れ、負債で覆うことはできる。

だから私たちは、別の闇を造ることによって影に打ち勝つのではない。

臨在は妨害を明らかにする。

真理はそれを名付ける。

意志は通過を妨げていたものを取り除く。

業は実りを修復する。

影を永遠のアイデンティティにしてはならない。

真理をもって眺められるとき、それは窓が開かれるべき場所を示す。

光は在る。

影は生じる。

真理はとどまる。

嘘は、それを生み出す形を隠せなくなるときに終わる。

一者の全体に対する責任

一体は差異を消し去るものではない。それを絶対的な分離に変えることを妨げるのである。

「すべては一つ」と言うだけでは十分ではない。

その言葉が他者の固有の経験を無視することを許すなら、その人物は統一性を自分のものにしてしまっている。

私たちは同じ思考、記憶、身体、歴史を共有しているわけではない。

私たちが共有しているのは、あらゆる経験を可能にした根源と、いかなる形もそれ自体では生み出せなかった命である。

統一性には差異が必要である。

差異がなければ、出会いも、傾聴も、関係も、固有の実りも存在し得ない。

差異には統一性が必要である。

それがなければ、差異は無関心や、階層や、支配へと変わり得る。

意識が人物の周りに収縮しなくなるとき、他者の痛みは完全に無関係な現実として退けることができなくなる。

これは彼らの声を自分のものにすることを意味しない。

それは、傷ついた彼らの命が、私たちの責任の領域に入ることを許すことを意味する。

分離した意識は問う：

「これは私と何の関係があるのか？」

すべてと一つである意識は問う：

「私たちの間で何が起こっているのか、そして私は何を捧げることができるのか？」

統一性はあなたに他者に対する権利を与えない。

それは、他者を無視する言い訳を取り去るのである。